
リア充爆発した。

夕星 祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リア充爆発した。

【Nコード】

N2787BA

【作者名】

夕星 祭

【あらすじ】

カップルどっかーん。

僕の高校生活に、癒しと安らぎを与えてくれていたものが、たった今、もろくも崩れた。

「B組の斎藤にさ、彼氏ができたんだって」

昼休みの教室で机に突っ伏しながら周りの雑踏に耳を傾けてみると、そんな会話を釣り上げた。その言葉は瞬く間にして僕の全身に拡散し、血液を沸騰した。冷や汗が湧き出してきた。

斎藤さんは僕の、いわゆる初恋の相手だった。眉目秀麗で文武両道。資産家の両親を持ちながらも気取った様子は微塵も見せない日傘の似合うお嬢様。しかし恥ずかしがり屋で、色恋沙汰となるとうつ向いて顔を赤らめる。彼女を前にして、微塵も食指の動かない男子など、いるわけがないと断言できるほどだ。

高校一年生の時分に同じクラスになって以来、僕はずっと彼女の後を追いつけた。しかし今ここで、僕の青春は破綻して霧散したのだった。

まさか、彼女が人と付き合うだなんて夢にも思わなかった。万が一付き合うとしても、相手は僕じゃないと思っていた。

ああ何故だ。何故彼女は僕を裏切ったのだ。私は彼女を恨んだ。突然ではあるが、僕は顔にはそれなりの自信がある。父がイギリスのウェールズ地方出身で、いわゆるハーフというやつなのだ。性格にも、さほど難があるとも思っていない、むしろ良いような気がする。彼女レベルではないにしろ、僕は出来た人間なのだ。それでも彼女には釣り合わない、と、神は言うのだろうか。

放課後のことだ。部活に所属していない僕は、まっすぐ帰路についていた。道程の中ほどあたりにある、視界360度に畑と山を

見ることが出来る田舎道で、僕は誰かにぶつかった。

よそ見をしていたようだ。やはり昼間のあれが意識をちらついていた。

顔をあげて謝ろうとすると、目の前に立っていたのは、全身を黒く気飾った女の子だった。

「あ、ごめん」

その姿を見て、予定していたものよりもやや碎けた台詞を使つて謝る。

彼女は言葉を返してはこなかった。静寂が流れ、諦めた僕は、彼女の横を通り過ぎて、帰路に戻ろうとした。

「あなた、悩み事がありますね」

突如、彼女にその声をかけられた。僕はいきなりすることに驚きながらも振り返った。

「な、なんだよいきなり」

「私は悪魔です。言葉で説明するよりも実際に見てもらったほうが早いでしょう。あの山を見てください」

彼女はそう言つて、辺りにあった山の一つを指差した。僕が疑りながらそちらを見ると、山が空を飛んで行き雲の中に消えた。

「ちよつ、え!？」

山は飛ばない。その当たり前の誰もが弁えている常識を、目の前で覆され、僕は口をあんぐりと開いて、立ちぼうけていた。

「めんどくさいので、手短にお話しします。私は悪魔です。いろいろこちらの事情により、人間の願いを叶えることになりました。で、たまたま当たったのがあなたです。喜んでください。つまり、あなたの願いを一つだけ叶えてあげます。早く言ってください。ただし願い事は一つだけです。あと、昔話よろしくの願いを増やすなんてふざけた手も無しです」

そうまくし立てられ、混乱はしたものの、彼女が悪魔とやらであり、そして、僕の願いを叶えてくれるらしいという、重要なことだけはなんとか拾い上げることができた。

悪魔という言葉は、なんと怪しさ万点ではあるけれど、目の前で起こった謎の半重力現象は、その怪しさを正しさに変えるくらい、奇異さを持ち合わせていた。

多分、彼女がそういった怪異的な存在であることはたしかなのだろう。つまり結論を言くと、僕は運の良いことに、何か願い一つを叶えて貰うことができるようだった。

一連の思考を数秒で済ませると、僕はさっそく、どんな願いを告げるべきか思案を開始した。

「不老不死とか駄目かな」

「駄目というわけではありませんが、精神と違い、肉体は限りを持つものなので、朽ちて行く肢体と共に過ごす時代がいずれやって来ることになりますが。それでもよろしいですか？」

「うげ、やっぱりいいや」

僕は某バイオハザードすら直視できないのだ。そんなもの御免である。

そのとき僕は、昼間のことを思い出した。僕をないがしろにして誕生したカップル。妬ましい。羨ましい。

「じゃあ、カップルを壊滅させるような能力を授けてはくらないかな。派手に、もう爆発するくらいの勢いで壊滅させらるんだっとなお良いよ」

「構いません」

彼女は即答した。

「では、半径五メートル以内のカップルを、否応なしに爆発させるような能力は如何でしょう。はかどりませ、おやっさん」

「ああうん、それでいい。でも無差別でぼんぼんやられると、少しやかましいかな。こう、対象をフィルタリングできたりしない？」

「では、指定した条件に当てはまるカップルは爆発から除く、というスキルを付加しておきますね」

「ありがとう」

僕は頭を軽く下げた。顔を上げると、彼女は消えていた。

僕は、たつた今、自分に能力が与えられたことを感じる事ができた。

とりあえず不用意な誤爆を防ぐために、日本人のカップルは対象からはずして置いた。いずれピンポイントに対象に加えればいい。僕は上機嫌で帰宅した。

リビングからは両親の団らんの声が聞こえた。おお、匂いから察するとどうやら今日はすき焼きらしい。僕はさらに機嫌を良くした。

そのままリビングの扉を引こうとした刹那、途轍も無い重量の光が視界を占拠した。間髪入れずに、経験したことのないような突風が体を刺し、脇を抜け、それが爆風だと気がついたときには、もう五感が消えかけていた。

薄れゆく意識の中、僕は悟り、理解した。身近にいた伏兵の存在を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2787ba/>

リア充爆発した。

2012年1月7日01時48分発行